

友の会 新分科会

「古代東北アジアと日本研究会」によるぞ!

縄文から弥生へ、日本列島の社会と文化の歴史的転換は、朝鮮半島からの渡来人によってもたらされました。水田稲作、土器様式、環濠集落、青銅器、鉄器、墓制など弥生時代の基礎文化は朝鮮半島を経由して北部九州に伝来したのです。これらの文化のルーツはどこにあるのでしょうか…。それには古代東北アジア地域—中国東北部から遼寧省地域、そして朝鮮半島の歴史と文化を知ることが大切だと思いました。昨年10月に、弥生文化研究会の有志が中心となり毎月一回の勉強会を始め、7月から新しい分科会「古代東北アジアと日本研究会」(略称:古代東北アジアの会)として発足しました。

学習の方法は、テキストとして大貫静夫著「東北アジアの考古学」(1988年、同成社)を採用し輪読、極東地域における紀元前2千年紀から雑穀農耕文化の展開を討論、続いて第2回は、宮本一夫著「農耕の起源を探る—イネの来た道」(2009年、吉川弘文館)をテキストに始めました。また、ほぼ隔月に埼玉大学准教授・中村大介先生をお招きして講義を受けています。すでに「粘土帯土器文化」「遼寧式銅剣の諸問題」「支石墓と周溝墓」「装身具の流通」「草原の青銅器」など最先端の研究成果を学びました。

古代東北アジアは、現在の領域区分では中国東北部地方、朝鮮半島そして、シベリアの一部となっている極東地域です。『魏志』東夷伝には烏丸、鮮卑、扶余、高句麗、挹婁、沃沮、などの記事が出てきます。遙かなる時を経て金、清という中国を統一する王朝も出現します。厳しい環境を生き抜いてきた農耕遊牧民・騎馬民族の活力を、現代中国の研究者は高く評価しています。今まで歴史の片隅に埋もれていた古代東北アジアの文化を掘り起こし、日本列島の古代文化に与えた影響を学習したいと思います。「古代東北アジアの会」は全員参加の楽しい運営をモットーに、テキストの輪読と、外部講師の講義との2本柱を中心として、新しい知識を吸収する喜びを満喫しております。(勝尾 実)

▷例会: 毎月第3木曜日 10時~12時

▷場所: 博物館教室ほか

【明治大学博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学博物館 友の会気付
メールアドレス meihakutomonokai@yahoo.co.jp
※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。
連絡は必ずハガキまたはメールをお願いします。

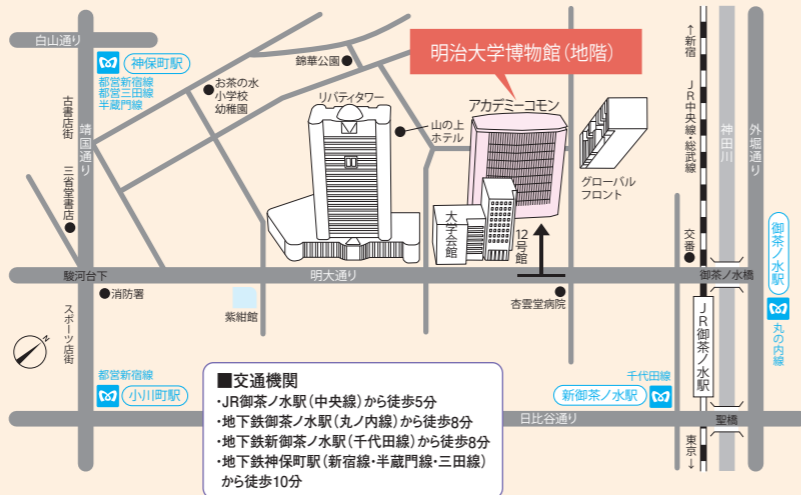
博物館案内

博物館案内

- ◆開館時間
10:00~17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日
夏季休業日(8/10~8/16)
冬季休業日(12/26~1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- ◆開室時間
月~土 10:00~16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
- ※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



交通機関
JR御茶ノ水駅(中央線)から徒歩5分
地下鉄御茶ノ水駅(丸の内線)から徒歩8分
地下鉄新御茶ノ水駅(千代田線)から徒歩8分
地下鉄神保町駅(新宿線・半蔵門線・三田線)から徒歩10分

編集後記

おかげさまで、明治大学博物館はリニューアルからめでたく10周年を迎えました。今年度は特別展「藩領と江戸藩邸〜内藤家文書の描く磐城平、延岡、江戸〜」を開催します。これからもMUSEUM EYESを通して博物館の情報を分かりやすく、豊富に伝えられるよう目指してまいります。

MUSEUM

ミュージアム・アイズ

EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

Vol. 63
2014

特集・特別展



内藤家文書の描く
磐城平、延岡、江戸

藩邸
江戸



藩領



Contents

- 博物館活動報告——大船渡市震災復興支援事業/国際博物館の日記念事業/前場幸治瓦整理プロジェクト終了報告
- 南山大学協定通信/図書室から
- 展示&リサーチ——「近代日本の幕開けと私立法律学校—神田学生街と法典論争—」展
- 学芸研究室から——“漆”への取り組み
- 市民レクチャー——坂本万七撮影による文化財写真について
- 収蔵室から——古代ギリシア陶器 黒像式エグザレイプトロンと赤像式スキュフォス
- 博物館入館者数の動き/団体見学の記録/M2カタログ/博物館友の会から

藩領と江戸藩邸

～内藤家文書の描く 磐城平、延岡、江戸～

会期 2014年10月11日(土)～12月11日(木)
 会場 明治大学博物館特別展示室
 開館時間 10:00～17:00(入室は16:30まで) 会期中無休
 主催 明治大学博物館
 後援 いわき市教育委員会 延岡市教育委員会
 入場料 300円
 明治大学生・同教職員、明治大学博物館友の会会員、リバティアカデミー会員、明大カード会員、高校生以下の児童・生徒と引率教諭、愛の手帳・身体障害者手帳所持者は無料

内藤家は上総国佐貫(現・千葉県)、陸奥国磐城平(現・福島県)、日向国延岡(現・宮崎県)を藩領とした譜代大名です。江戸時代の内藤藩と近代の内藤家の歴史を書き留めた内藤家文書は、2013年に明治大学に移管されて50年目を迎えました。さらに、2015年には内藤家文書目録が刊行されて50年目を迎えます。この長い月日を記念して、2014年度は内藤家文書の展覧会を開催する運びとなりました。

江戸時代の藩は、国元だけではなく、江戸屋敷や大坂屋敷、飛地などの空間からも構成されていました。江戸期の内藤家文書には、佐貫藩時代(元和8、1622年まで)の記録は殆ど残されておらず、磐城平藩時代(延享4、1747年まで)、延岡藩時代(延享4年以降)の記録が現在に伝わっています。そして、この中には国元の統治に関する記録だけではなく、江戸藩邸の記録も含まれています。内藤家文書の概要を、大きくは国元、そして江戸藩邸、加えていくつかの派生する地点—大坂や飛地—に関する記録群だと説明する事も出来るでしょう。この様な内藤家文書の存在形態そのものが、「藩」が複合的な要素によって成立している事を示しています。

本展示会では、内藤家文書をひもといて、藩領と江戸藩邸を基点に広がる江戸時代の藩を描きます。内藤家文書が江戸時代の磐城平、延岡、江戸の様子を鮮やかに描き出してくれる事でしょう。また、各時代、各領地をつないだ内藤家文書のあり様や、廃藩置県後に行政資料としての役割を終えた内藤家文書の行方など、磐城平から始めて、明治大学に譲渡されるまでの内藤家文書の歩みをたどり、歴史を伝える長い営みのバトンを受けて、現在の内藤家文書がある事を紹介します。

- I 江戸藩邸 大型絵図や江戸の切り絵図で内藤藩の虎ノ門屋敷、六本木屋敷、渋谷屋敷の様子を確認したら、江戸藩邸で過ごした藩主や武士達の生活を覗いてみましょう。
- II 磐城平領 10里を超える「磐城七浜捕鯨絵巻 浜の巻」(いわき市蔵)が、磐城平領の海岸線とそこで暮らす人々の姿を圧倒的なスケールで描き出します。
- III 延岡領 幕末の参勤交代制の揺らぎによって江戸と延岡を旅する事になった藩主内藤政挙の祖母充真院。充真院の旅の行程を、彼女が書き残した絵入旅日記と海上の図で紹介いたします。
- IV 藩の終わりと文書 藩の終わりにより江戸藩邸、延岡城は、そして文書は、どうなってしまったのでしょうか。江戸から明治への移行期、藩邸・城・文書の行方を追います。

【表紙解説】

磐城平藩三代目藩主内藤義概(1619-1685)、内藤義概の息子義英(1655-1733)は俳諧で著名な人物である。奥州俳壇の棟梁的存在と評される義概は、その屋敷が虎ノ門にあることから、俳号を風虎とした。虎ノ門上屋敷の義概の蔵本は、「牘庫」の蔵書印から牘庫本と称され、当時から世に知られたものであった。息子の義英は藩主跡継ぎになるものの、天和2(1682)年に退身し、弟の義孝に跡継ぎの地位を譲る。義英は、元禄8(1695)年迄は江戸暮らしで、江戸では松尾芭蕉などと交流し、磐城平に下ってから領内の寺社や豪商と結びついて俳諧のサロンを形成した。義概、義英の活動は、藩主家を通じた文芸の世界が、江戸と国元をより近く結びつけている事を窺わせる。

内藤家伝来印章

延岡藩二代目藩主政陽以下、政脩を除く歴代藩主の印章を中心とした印章群。このうち、螺鈿漆小筆筒と点印は内藤義英(露沾)の遺物という。印箱と点印は、露沾の弟子の内藤家家臣に伝えられていたが、売却されて一時骨董商の元にあり、大正期に旧家臣が買い戻し内藤家に献上したという来歴を持つ。なお、点印とは、点取俳諧で、評者が評点として押す印形の事。点印は元禄期ごろから使われ始め、俳諧師でなくても、自分の点印を持つことが流行するようになる。



【内藤家江戸屋敷の所在地】江戸御上屋敷絵図、江戸六本木御屋敷絵図、渋谷御屋敷絵図、御殿向御長屋敷絵図、江戸本庄御屋敷絵図(全て内藤家文書)

江戸の大名屋敷は、その用途から、藩主が居住する上屋敷、隠居した藩主や嗣子などが住む中屋敷、火除け他多彩な目的で使用された下屋敷に区分される。また、幕府からの拝領屋敷の供給量は十分ではなかった為、郊外の百姓地を武家が自ら買い取る事もあった。このような屋敷を、幕府から拝領する拝領屋敷に対して、抱屋敷と呼ぶ。内藤家の屋敷は、虎ノ門と六本木の屋敷が拝領屋敷で、渋谷の屋敷が抱屋敷である。また、一時期は本所にも抱屋敷を所持していた。

中世以来磐城平地方を治めた岩城氏、磐城平城を築城し町割りを行った鳥居氏に続き、元和8(1622)年に内藤政長が磐城平領の領主となった。

磐城平城は、浜通り南部、夏井川流域の沖積地に位置する。内藤家の前領主鳥居家が、慶長8(1603)年から12年の歳月を費やして、磐城平城を築城した。

内藤藩の磐城平領は、陸奥国磐城郡のうち47ヶ村、磐前郡のうち74ヶ村、菊多郡のうち3ヶ村、檜葉郡のうち34ヶ村からなる。



奥州岩城平之城絵図(内藤家文書)



延岡城下家中屋敷割図(内藤家文書)

延享4(1747)年3月19日、内藤家は転封を命じられた。内藤政樹陸奥国磐城平7万石、牧野貞通日向国延岡8万石、井上正経常陸国笠間6万石の三方領知替で、内藤家は延岡へ、牧野家は笠間へ、井上家は磐城平へ転封する事になった。内藤家が牧野家から引き渡された延岡城は、五ヶ瀬川と大瀬川にはさまれた台地の先端に築かれた城で、慶長6(1601)年から8年にかけて高橋元種が築城した。歴代城主は、高橋氏、有馬氏、三浦氏、牧野氏で、内藤家は5家目の城主となった。

藩領と江戸藩邸 | 関連イベント

～内藤家文書の描く 磐城平、延岡、江戸～

リバティアカデミーオープン講座

博物館特別展開幕記念講演会 「譜代大名とはなにか」

講師：福島大学准教授 三宅 正浩
日時：10月10日(金) 15:00～16:30
会場：グローバルフロント1階グローバルホール
満員御礼!! 申し込み人数に達しました。

リバティアカデミーオープン講座

博物館特別展開連講座 「藩領と江戸藩邸」

会場：駿河台キャンパス
受講料：4,000円

本講座では、展示の世界をより深く理解出来るように、各分野の専門家が「藩領と江戸藩邸」展で取り上げたテーマ(江戸と国元、内藤家文書、文化財など)を、様々な角度から論じます。

10月25日(土)13:00～14:30 講師：柳川古文書館学芸員 白石 直樹

「絵文字の殿様—柳川藩5代藩主立花貞俣(さだよし)と江戸・柳川—」

●柳川藩の殿様立花貞俣は、江戸藩邸の家老立花政元という家臣に対して国元や参勤交代の道中から多くの書状を出しました。政元は信頼のおける打ち解けた関係の家臣。貞俣は絵文字を使った洒落っ気たっぷりの手紙も残しています。貞俣のユーモアあふれる手紙は、「江戸時代の殿様ってこんな人なの?!!」と、皆さんを楽しませてくれる事でしょう。

11月8日(土)13:00～14:30 講師：明治大学博物館学芸員 日比 佳代子

「展示絵解～藩領と江戸藩邸～」

●「藩領と江戸藩邸」展では、大型の絵巻や絵図を複数出展します。江戸の屋敷や城下絵図、岩城平領の海岸線の絵巻、それぞれどんな情報が書き込まれているのでしょうか。さらに、関係する内藤家文書を合わせて見てゆくと、内藤藩の藩士達の生活や領民の姿まで、江戸時代の世界がどんどん広がって行きます。

11月22日(土)13:00～14:30 講師：福島県歴史資料館学芸員 小野 孝太郎

「地域文化財の保全・活用について—福島県歴史資料館での活動を中心に—」

●内藤家文書は様々な人々の手によって今日まで伝えられてきました。内藤家文書の様に、大学で古文書を保存するののも一つのあり方ですが、地域の古文書館や資料館で文化財を保存する事も広く行われています。内藤家が近世の前半に所領をもった福島県を対象に、福島県歴史資料館での地域文化財の保存・活用の実際をご紹介します。

申込：事前予約制、受講にはリバティアカデミーへの入会が必要です。
リバティアカデミー事務局 TEL03-3296-4423 URL <http://academy.meiji.jp>

【表紙解説】

磐城七浜捕鯨絵巻 浜の巻 (いわき市指定有形文化財、いわき市蔵)

本品は、磐城七浜の風景とそこで展開する捕鯨の様子を描いた絵巻。磐城七浜とは平沼ノ内から小名浜までの海岸の事。身分の高い人物が捕鯨を見覧する様子を描いた「海の巻」と一揃いで内藤家に伝来した。内藤義概は磐城平の様々な自然を歌に詠んだが、義概がまとめた俳諧撰書『桜川』には、

同(陸奥の)中野さくと云所にて親子鯨を突ければ
つくやくしやおや子のわかれ中のさく

など、磐城平の地名と共に冬の季語「初鯨」を詠んだ義概の句が5句収められている。本絵巻の制作年代は不明であるが、「海の巻」に描かれた人物が内藤義概か内藤義英であろうとの解釈から、寛文から享保頃の作とも言われる。1992年11月11日に故内藤政道氏からいわき市教育委員会へ寄贈された。寄付の書類には政道氏の「末永く市民の文化に役立てて下さい。」との言葉が添えられている。内藤家統治時代(1622-1747)の磐城平の海岸線の様子を今に伝える貴重な史料である。

●博物館活動報告

MUSEUM EYES

大船渡市震災復興支援事業

岩手県大船渡市で震災復興支援事業を実施しました

明治大学と大船渡市は、2012年4月23日に震災復興支援に関する協定書を締結しています。大船渡市立博物館から同館の博物館活動への協力依頼を受けた博物館は、現地での展覧会、講演会、体験教室の実施を計画し、2014年度事業として実施しました。講演会・体験教室は、展覧会の会期中に行い、講演会では大船渡市の「成人大学講座」の一環として当館学芸員2名が講演しました。埴輪資料を使った体験教室は大船渡市が実施している「夏休み子ども大学」の一環として開講しました。

1.震災復興支援事業 特別展覧会「明治大学コレクションの世界—氷河期から昭和まで—」

【展示内容】明治大学博物館の考古・刑事・商品の個性的な歴史コレクションをもとに、氷河期から昭和時代までの歴史をたどります。また、東北地方にゆかりのある考古・歴史コレクションをあわせて展示しました。

【主催】明治大学博物館・大船渡市立博物館

【後援】朝日新聞盛岡総局、読売新聞盛岡支局、毎日新聞盛岡支局、岩手日報社、岩手日日新聞社、河北新報社盛岡総局、東海新報社、IBC岩手放送、NHK盛岡放送局、テレビ岩手、岩手めんこいテレビ、岩手朝日テレビ

【会期】2014年7月26日(土)～8月31日(日) 会期中無休

【入館料】小中高生無料 一般300円

【会場】大船渡市立博物館特別展示室

【主な展示品】

群馬県岩宿遺跡出土品(旧石器時代:重要文化財石器レプリカ)、岩手県雨滝遺跡出土品(縄文時代:土器・土偶)、青森県亀ヶ岡遺跡出土品(縄文時代:土偶)、銅鐸・銅矛(弥生時代)、農夫埴輪・馬形埴輪(古墳時代)、東大寺軒丸瓦(奈良時代)、大阪城金箔瓦(中世)、御成敗式目写本(中世)、生類憐み令(江戸)、奥州岩城平之城覚書(江戸)、十手(江戸)、東京名所新橋ステーション蒸気車之図(明治)、懐かしの生活用品(昭和)ほか、合計175点

2.成人大学講座

【日時】2014年7月31日(木)・8月21日(木)13:30～15:30

【会場】大船渡市民交流館カメリアホール

7月31日：「東北の大名から江戸時代をみる」

明治大学博物館刑事部門学芸員 日比佳代子

8月21日：「氷河期の日本列島と最古のハンター」

明治大学博物館考古部門学芸員 島田和高等



旧石器～安土桃山時代まで一堂に展示

3.夏休み子ども大学「出張!子どもはにわ教室」

明治大学博物館が所蔵する古墳出土の埴輪資料の実物を使い、古墳や埴輪の実際をやさしく解説しながら、破片の接合復元などを体験しました。

【日時】2014年8月7日(木)13:30～15:30

【会場】大船渡市綾里地区コミュニティ施設・綾姫ホール

【講師】明治大学博物館考古部門学芸員 忽那敬三

展覧会開幕前日には、風間信隆館長が、戸田公明大船渡市長を表敬訪問し交流を深めました。開幕日には戸田市長、今野洋二教育長も見学に訪れました。会期中は1,264人の見学者がありました。展覧会の開催は地元新聞でも大きく取り上げられ、展示品の解説記事も連載されました。成人大学講座では、地元の方を中心に70名近い受講生が集まりました。子どもはにわ教室では、11人の地元小学生が東北地方では目にする機会の少ないはにわを手にとって目を輝かせていました。震災から3年以上が経ちますが、いまま震災復興に尽力されている地元の方々に、今回の事業が多少でも文化的な側面からの支援となつたとすれば幸いです。



展示を視察する大船渡市長(左)と明大博物館長(右)

それいけ! 博物館探検隊

—触れて体験、楽しく学ぼう— を開催

5月18日は国際博物館の日。ICOM(国際博物館会議)が博物館事業・教育の普及啓発を目的として1977年に定めました。我が国ではまだまだ馴染みがないかもしれませんが、日本博物館協会が「国際博物館の日実行委員会」を組織し、例年、会員各館に記念行事の実施を呼びかけ、各地でさまざまなイベントが開催されています。明治大学博物館では、記念日の前日となる5月17日(土)に、「それいけ! 博物館探検隊」と銘打って、収蔵資料をガラスケース越しではなく生で観覧したり手に取って学べるハンズオン・イベント、普段は非公開の収蔵施設や資料整理室などのバックヤードを案内するツアーなどで構成されるイベントを実施しました。バックヤード・ツアーは定員10名のコースを3回実施、小学生から大人まで28名の参加がありました。



当日、エントランスホールでは馬形埴輪とマンモスの頭骨レプリカがお出迎え。記念撮影のコーナーを設置しました。博物館教室では「刑事」関係の資料を展示。常設展の写真パネルとなっており、テレビ放映などの機会の多い『徳川幕府刑事図譜』の原本を全編公開。十手や手鎖、捕者三道具(突棒・袖搦・刺又)を手にとってその重量感を体験。体験学習室の「考古」のコーナーでは動物化石、石器、土器、瓦、埴輪、鏡を出展。それぞれ手にとって質感を確かめたり、石器で紙を切ってみたり、埴輪片の接合といった体験学習をお楽しみいただきました。



瓦整理プロジェクト終了報告

前場幸治瓦コレクションの整理プロジェクト が終了しました

大工の棟梁であり、また瓦研究者としても知られる前場幸治氏(1933-2011)から寄贈された国内でも屈指の規模をもつ瓦を中心とする考古資料コレクションについて、当館では明治大学日本古代学研究所の協力のもと2010年度から3年間にわたって全容を明らかにするプロジェクトに取り組んできました。その結果、前場氏のコレクションは、主に日本や東アジア地域、時期は古代から現代にわたる瓦資料が中核をなし、あわせて関連書籍や瓦の拓本、縄文時代から近世にわたる土器や石器、青銅器、埴輪、板碑、一字一石経などの考古資料や明治期の西郷隆盛の肖像画に至るまで、実に幅広い内容をもつ約1万点にもほぼ一大資料群であることが明らかになったのです。これまでも中間報告として代表的な資料について2010年の企画展や2013年の特別展で公開されたほか、森本尚子氏や鈴木知子氏により、本誌や明治大学博物館研究報告等で紹介されていますが、プロジェクトの総括として2013年度末に主要資料を収録した目録(非売品)を刊行しました。これにより、コレクションの概要を知ることが可能となり、コレクションの周知と外部の研究者や機関による学術資料としての活用の促進が期待されます。整理プロジェクトは終了しましたが、当館では今後も展示や研究を継続し、貴重な資料の活用に取り組んでいきます。



● 南山大学協定通信

MUSEUM EYES

2014年度の交換展示を実施しています

明治大学博物館と南山大学人類学博物館との第2次協定事業(2013~15年度)の一環として、2014年度の交換展示(常設展示室の一部を使用したケース展示)を実施しています。南山大学会場では、「東日本の再葬墓」と題し明治大学博物館が収蔵する、弥生時代の再葬墓(人が死んだあと、遺体を骨の状態とし、その一部を土器の中に入れて埋葬した墓)に使用された土器や人骨を展示しています。なかでも、再葬の存在を明らかにした千葉県天神前遺跡や、戦前の杉原荘介氏による調査例として著名な群馬県岩櫃山遺跡(東吾妻町指定文化財)など、学史的にも重要な資料が出展されています。明治大学会場では、ユーミン族やアカ族など、南山大学人類学博物館が所蔵するタイ北部の女性の衣服を中心とした資料を出展します。民族ごとの衣装の違い、また精巧な技法などが注目されます。弥生時代の再葬墓は東海地方には少なく、またタイの民族資料も学術資料として公開される機会が少ないものであり、明治大学・南山大学のそれぞれの学生や博物館来館者にとって貴重な機会となるはず。あわせて、期間中に一般向けギャラリートークや学生対象の講座も実施されます。



南山大学会場:「東日本の再葬墓」

2014年9月11日(木)~11月8日(土) 日曜・祝日休館、入場無料
 主な出展資料:
 殿内遺跡(茨城県)、六野瀬遺跡(新潟県)、
 岩櫃山遺跡(群馬県)、天神前遺跡(千葉県)等各遺跡出土の再葬墓資料
 ギャラリートーク:「東日本の再葬墓」
 講師…忽那敬三(明治大学博物館学芸員)
 日時…2014年10月4日(土)13:00~14:00
 定員…20名(事前申し込み不要、参加無料)
 会場…南山大学人類学博物館実習室

明治大学会場:「これがわたしのお気に入り ~タイ北部少数民族の女性の衣服~」

2014年9月10日(水)~11月9日(日) 会期中無休、入場無料
 主な出展資料:
 ユーミン族・モン族・リス族・アカ族の女性の衣服等
 ギャラリートーク:
 「これがわたしのお気に入り・タイ北部少数民族の女性の衣服 出典資料とその背景について」
 講師…西川由佳里(南山大学人類学博物館学芸員)
 日時…2014年10月18日(土)11:00~12:00
 定員…30名(事前申し込み不要、参加無料)
 会場…明治大学博物館教室(明治大学アカデミーコモン地下1階)

図書室から

発掘調査報告書と遺跡資料リポジトリ

図書室所蔵資料において大きな比重を占める発掘調査報告書。今回は、その発掘調査報告書の電子化・公開を行っている歴史・考古学分野のサブジェクトリポジトリである遺跡資料リポジトリの紹介を行います。

発掘調査報告書の多くは、入手が困難な灰色文献です。灰色文献とは商業出版ルートに乗らず少数部数発行の寄贈等にとどまる等の特徴を有した文献をさします。そのため、当図書室に寄贈された発掘調査報告書は、重複等を除き全て図書室の蔵書として受入しています。

遺跡資料リポジトリは、需要はあるものの灰色文献ゆえ利用が難しかった発掘調査報告書の活用促進のため、平成20年度国立情報学研究所の最先端学術情報基盤(CSI)委託事業として中国5県域から開始されたプロジェクトです。またその代表機関である島根大学の事務局は、全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクトの活動が評価され、平成26年度国立大学図書館協会賞を受賞しました。平成26年6月時点での集録範囲は22大学、22府県域となっており、約14,000冊の発掘調査報告書が公開されています。

なお委託事業は平成24年度で終了しましたが、現在も遺跡資料リポジトリの参加については募集が行われており、より多くの機関の参加が望まれます。

全国遺跡資料リポジトリ <http://rarcom.lib.shimane-u.ac.jp/>
 平成26年度国立大学図書館協会賞審査結果報告 http://www.janul.jp/j/operations/award/shinsa_26.pdf

専修大学大学史資料課・中央大学大学史編纂課・日本大学大学史編纂課・明治大学史資料センター主催

「近代日本の幕開けと私立法律学校 —神田学生街と法典論争—」について

阿部 裕樹 (明治大学史資料センター)

1 展示概要

本企画展は、「神田」において「私立法律学校」として誕生し総合大学へと発展した4大学(専修大学、中央大学、日本大学、明治大学)のアーカイヴズ担当機関が主催しました。会期は2014年1月24日(金)から2月28日(金)まで、会場は明治大学博物館特別展示室を利用させていただきました。展示資料はおよそ150点、来場者数はおよそ2500名でした。

2 展示構成

本企画展では、「神田」(旧神田区)というエリアと、そこに所在する「私立法律学校」の創業者・講師・卒業生・学生たちの動向に注目しました。また、対象とした時代は「私立法律学校」の創業者たちが誕生する幕末期を起点として、「私立法律学校」が法制上大学となる

大正時代までとしました。ただし、例外的に、「神田」の街並みや学生を捉えた写真については、神田と学生というコーナーを設け、昭和戦前期までを対象として展示しました。

構成は5章に分けました。章のタイトルは次のとおりです。

- 1 神田学生街の形成
- 2 明治維新と文明開化—法律学校創業者たちの修業時代—
- 3 私立法律学校の胎動
- 4 法典論争の中の私立法律学校
- 5 私立法律学校のゆくえ—総合大学への道—

3 大学アーカイヴズと 展示会

大学アーカイヴズが収集・保存する資料は、おもに大学の内部文書、学生・教職員・卒業生に関する諸資料となります。そのため、単独の大学アーカイヴズが主催する展示会(展示)の内容は、大学の歴史や大学関係者を紹介する

ものがほとんどです。また、特に私立大学の場合に顕著ですが、大学アーカイヴズが主催する展示会には、大学広報(宣伝)の効果を求められることもあります。明治大学にある「大学史展示室」や「阿久悠記念館」(※阿久悠氏は明治大学の卒業生)は、いずれも常設展示ですが、展示内容から見れば単独の大学アーカイヴズが主催する典型的な展示といえます。

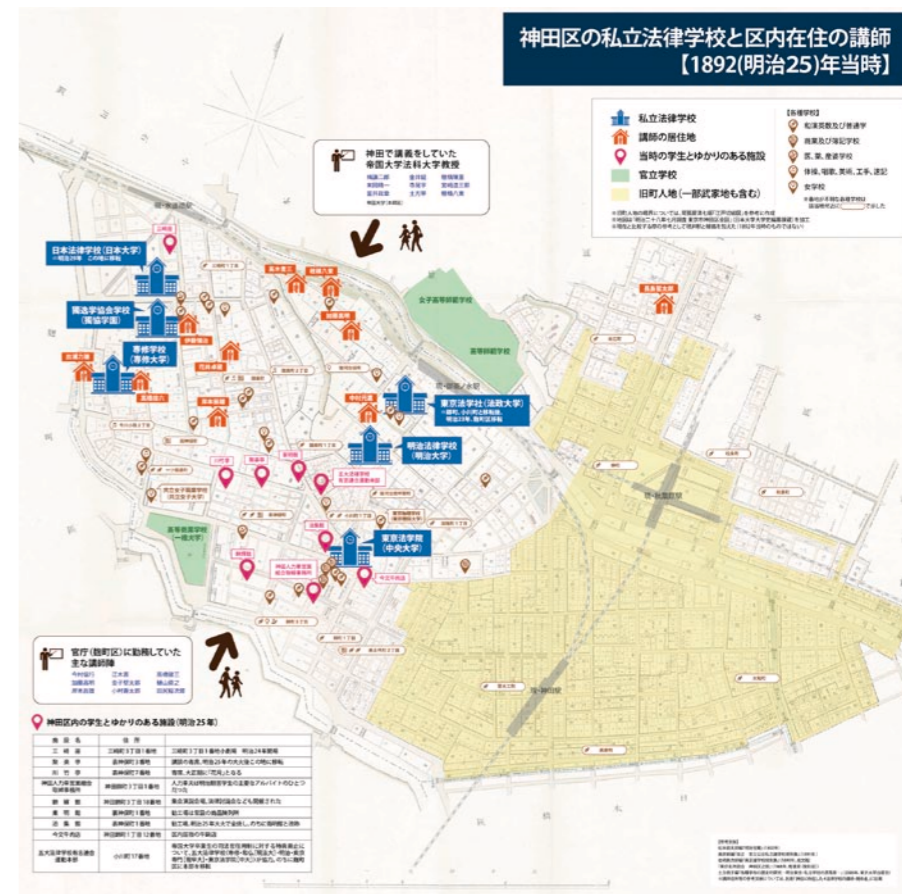
一方で、近年では、展示会を複数の大学アーカイヴズで、あるいは大学アーカイヴズと他機関で共催するケースがみられます。萩市主催・日本大学大学史編纂課協力「山田顕義と近代日本」(2014年4月19日~6月22日、於萩博物館)、石巻市・石巻専修大学・専修大学共同企画展「唱歌斉唱—「故郷」の作詞者・高野辰之の生涯」(2012年12月1日~12月16日、於東京エレクトロンホール宮城)、大学アーカイヴズの横断的組織である全国大学史資料協議会東日本部会を主催者として複数の大学アーカ

イズが関係資料を持ち寄って開催した「日本の大学—その設立と社会」(2010年1月15日~2月14日、於明治大学博物館特別展示室)などの例があります。これらを展示内容から見た場合、「近代日本」や「日本の大学」ということばに端的に現れているように、ひとつの大学の歴史の紹介という枠を超えていることがわかっていただけたと思います。「唱歌斉唱」展は、東日本大震災以降に最も多く歌われたといわれる「故郷」の作詞者である高野辰之が専修大学校歌の作詞者であった縁で実現したもので、復興活動に取り組む東北地方の方々に向けた展示会でした。このように、共催による展示会はひとつの大学の枠にとどまらない幅広い内容を持つことが期待できますが、大学広報(宣伝)の効果は見えにくくなることも事実だと思えます。

以上の区分でいえば、本企画展は後者に属します。しかし、4者共催というのはユニークな事例だと思います。そこで、4者共催であったために経験したこといくつかを紹介して、そこから本企画展の意義について考えてみたいと思います。

4 経緯と意義

本企画展を共催した4大学には、明治から昭和にかけて「神田」に所在した「私立法律学校(あるいは大学)」という共通点がある一方で、創立の年月、創立趣旨・教育理念、創立地など、多くの違いがありました。企画段階においては、4大学の共通点を手がかりに議論を重ねました。私立学校の場合、創立趣旨や教育理念など独自のアイデンティティを持っていますが、4大学の違いばかりを強調してしまうと展示会としてのストーリー性を欠いてしまうと考えたためです。結果として、「神田」・「私立法律学校」とともに、各校が関わった「法典論争」にスポットをあてまし



神田区の私立法律学校と区内居住の講師(部分)【1892(明治25)年当時】

た(ただし、英吉利法律学校<中央大学の前身、法典延期派>と明治法律学校<明治大学の前身、法典断行派>に象徴されるように、各校の主張には違いがあります)。また、各校の創業者たちの多くが海外留学を経験していたこと(ただし、留学先には違いがあります)、各校が法学普及の面で連携していた点などを資料とともに紹介しました。

資料選定の段階になると、共催のメリットを実感できました。所蔵資料の不備を補完できたことはその最たる例です。そのため、他機関から借用する資料も比較的少数でした。また、法典論争に際して発表された延期派・断行派双方の資料を同程度の割合で展示できたことも、そのひとつだと思います。例えば、明治大学単独の法典論争展であれば、どうしても断行派に偏った内容になってしまうでしょう。

本企画展を周知する意味での広報についても、各大学が持つ独自のネット

ワークを活用できたという点でメリットがあったと思います。実際、予想以上に多くの方にご来場いただけましたし、多くのマスメディアから照会・取材を受けました。また、対外的に強調するような点ではないかもしれませんが、展示費用を4分割したことで各校の経済的負担を軽減できたことも付記しておきたいと思っています。

以上から、4者共催にはテーマの設定などで議論は必要であったものの、展示資料の選定や広報の面、あるいは費用負担の面でプラスの効果があったことを指摘できると思います。また、これまでの大学アーカイヴズによる展示会の多くが単独開催であったことから、新しい可能性を提起できたという自負もあります。

最後になりますが、来場された方に任意でアンケートをお願いしたところ、多くのご意見が寄せられました。これらは担当者間で議論して、次回以降の展示会に生かしていきたいと思っています。



会場のような様子



ギャラリートークの様子

“漆”への取組み

外山 徹 (商品部門学芸員)

日本文化の中の漆

一般に“漆”という漢字は、ウルシ科に属する落葉高木である漆の木から分泌される樹液を意味する。液状であることからさんずいの漢字表記なのだが、植物としての漆木のことを“ウルシ”と区別して表記することがある。

漆は空気に触れると、成分の酵素が酸素によって活性化され、ウルシオールという樹脂分が結合・硬化する性質をもつため古くから塗料や接着剤として利用されてきた。漆の文化圏は、我が国の外、中国・朝鮮半島、ヴェトナム、タイ、ラオス、ミャンマーなどに広がる。

我が国の漆利用の歴史は縄文時代に遡り、約9千年前という説がある。古代には宮殿や寺社仏閣の造営、貴族の用いる調度類の製作に使用され、平安末には漆塗の椀を庶民も利用するようになったとされる。仏像の製作法としては脱乾漆による興福寺の阿修羅像、中尊寺金色堂に現存するような仏堂の内陣を飾りたてた金箔や貝片は漆で接着されている。武器・馬具の製造にも欠か



ウルシの林(岩手県二戸市)

すことはできず、金閣や大坂城など外装にも金をふんだんに使用した建築も登場する。16世紀からはヨーロッパ世界に輸出されるようになり、漆黒の艶やかな光沢となめらかな肌触りをもつ神秘的塗料として垂涎的となった。このことから、漆器のことを“Japan”、塗料を塗ることを“Japanning”と言うようになり、世界的には、漆の利用は日本の文化としてよく認知されていたと言える。江戸期には金蒔絵や螺鈿も、大名調度ばかりではなく、印籠や櫛・笄など庶民にも手の届く装身具に利用されるようになった。

こうした輝かしい漆の文化であるが、日本の漆生産量は、20世紀の初頭には中国からの輸入と逆転し、以後、減産の一途を辿り、現在では3%が自給されているに過ぎない。漆の採集は手作業による労働集約性が高く、人件費コストの高い我が国でこれを生業とするのは非情に難しい。さらに、天然漆を利用した製品の需要も割高感から年々減産の一途を辿っている。それについて、様々な要因を挙げることができるが、後段で検証することにした。



幹の傷から滲出する樹液

明治大学と漆研究

2011年に開催された特別展「漆器 JAPANWARE」は理工学部宮腰哲雄教授による漆研究、文学部阿部芳郎教授による縄文時代の漆器研究与博物館の漆器製品研究の成果をまとめた展覧会であった。従来、博物館・美術館における漆器の展覧会と言えば、平安～江戸期の古美術が専らであったので、博物館で取り上げる「漆」としてはまた違った視角を提示できたのではないかと思う。

宮腰教授の次世代機能材料としての漆研究は、漆の工業原料としての使用性を高める研究として、文科省から大型の研究助成を得るなど注目されており、過去にも実験開発されたサンプルの展示をおこなったことがあった。縄文漆器に関する研究と展覧会開催は近年コンスタントに見られるようになってきたが、科学分析という視点を加える試みとしては先駆的なものであった。阿部教授による研究の特徴は、道具としての機能性や製作技法への着目にあり、展示では漆を塗らない、あるいは使っていない製品や、漆器製品からデザイン上の影響を受けた土器、漆を塗るための道具類といった視点が盛り込まれた。

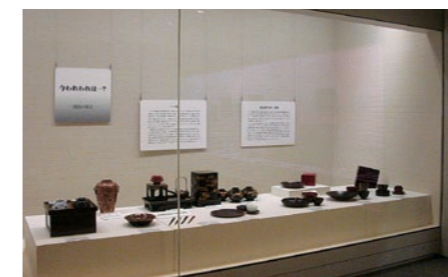
さて、商品部門が担ったテーマとしては、工業製品としての現状と最新の動向である。商品部門の資料収集体系

からすると、製品は1950年代後半以降から現代のものとなる。バブル経済崩壊の後、急激に売上が落ち込む中、90年代後半からは新たな商品開発の兆候が見えはじめていた。金蒔絵・螺鈿で飾るハレの食器としてではなく、普段使いをして漆本来の質感を味わうというコンセプトの商品群で、生活工芸品コーディネーター(ギャラリー運営)をなさっている方からいただいた示唆をもとに追いかけていた。その内、漆器製品というものが、機械製造の廉価品に押されて衰退したのではなく、経済成長とともに高級商品に昇華しつつ好景気によって需要を延ばしていたものであったことに気付いた。その意味で、バブル景気は伝統漆器の業界にとって最後となるよき時代であった。

これからの漆をどうするか?

館蔵品を振り返ると、ちょうど漆器製品が少し贅沢な家庭用品として受け容れられていった時期の製品やバブル期に製造された金蒔絵の正月用品など、第2次大戦後における漆器製品の推移を、数は少なくシンプルな表現とならざるを得ないながらも、辿ることができることが分かった。また、フェノール樹脂(ベークライト)やユリア樹脂による合成漆器も、漆器製品の変質を表現するのに恰好の資料となった。

こうして、戦後から現代を経由し、宮腰教授の新しい漆の開発へと展示シナリオをつなげることができたが、宮腰教



漆器展に出展された館蔵資料



2011年度特別展「漆器 JAPANWARE」の開催

授が課題とする漆の使用性の問題は合成漆器開発の要因でもあった。木を削って器胎をつくり、表面に下地加工を施し、さらに手塗りをして固化に時間のかかる漆器の生産性は著しく低かった。第2次大戦後の旺盛な需要増をまかなうには限界があった。合成漆器であれば、プラスチック器胎に下地の加工は不要で、スプレーによる吹付塗装が可能である。生産性も高く、結果的に価格もどんどん低廉となり、手工芸製品との比較では、例えば、漆椀を例にとれば3百～5百円と7千～1万円という約20倍の違いになる。手作業による手間のかかる加飾が加われればさらに差は開く。合成樹脂でも“ぬりもの”には違いないが、漆器ではない。そのため、初期には「代用漆器」と呼ばれたわけだが、それらの製品が戦後一般家庭の食卓において一定の役割を担ってきたこと、またそれがこれからも続くことは否定できない。実用品としては“ぬりもの”はむしろ石油化学製品なのである。ホンモノの漆を使った製品は嗜好性・趣味性の高い「高級消費財」となった。この辺りは、いかに機械化されようと原材料が手工芸

と基本的に同質である“やきもの”との相違となる。

それでは、伝統の手工芸による漆器はこれからどうなるのだろうか? 我々は、漆器の文化を存続させるために、単に実用の用に供せられればよいという以上の価値観をもつことが求められている。例えば、採取シーズンである夏の日の朝の漆林の香りや塗師の刷毛使いに思いを馳せることができなければならない。あるいは、塗り直しながら半生にわたる愛用の品とするか。

何れにしても、現代における漆利用の諸相は、現代の日本文化のあり様を反映したものに外ならない。それが、後世、先に述べたような漆文化の一連の流れの中にどう評価されるか、という問題なのである。高度成長期における手工芸品と合成漆器の立場の入れ替りは機械化による大量生産体制とモノ作りに対する皮膚感覚の喪失という時代の様相を示しているのである。16世紀におけるような黄金時代が再び到来するわけではない。漆文化の存続を問うということは、現代の文化的位相について理解し、今後それをどうしてゆこうかという問題である。

坂本万七撮影による 文化財写真について

文化財写真とは？

美術品や考古遺物を撮影した写真を、「文化財写真」という写真により、普段目にする事の少ない仏像や海外の美術品などを手軽に鑑賞することが容易になり、学術研究の分野では、資料を正確に把握することができる利点から広く普及している。また、災害など不測の事態に備え、復元のための視覚資料となることから、文化財写真の重要性は今日再認識されている。

坂本万七写真研究所資料

2004年10月、明治大学博物館には、写真家坂本万七の子息坂本明美より、坂本万七写真研究所旧蔵の文化財写真およそ10万点が寄贈された。写真群は、古美術、陶磁器、近現代美術、考古遺物、建築など、膨大な数の文化財を網羅的に撮影した、戦後期の坂本万七の写真の大半が確認され、当時日本に存在した文化財を概観できる貴重な視覚資料といえる。また、解体調査の様子や仏像の台座や光背を取り外した貴重な記録写真や(図1)、現在では散逸してしまった旧長尾美術館所蔵品や個人コレクターの所蔵品を撮影した写真も含まれる。

写真家・坂本万七について

坂本万七(1900~74年)は、美術工芸品や考古遺物の撮影を専門とする写真家として大正末から昭和40年代後半にかけて活躍した(図2)。坂本は、青年期に武者小路実篤が主宰する「新しき村」を経て、肖像や舞台を専門とする写真家となった。昭和初年の柳宗悦(民藝運動家)との出会いにより、民藝品の撮影に関心を傾け、深い作品理解に基づき、作品の本来の美しさを写真によって引き出すという、坂本の写真美学が培われた。戦時下には中国北東部の遺跡調査に同行し、文化財専門の写真家として注目され、戦後は、数多くの文化財を網羅的に撮影した。なかでも仏像の写真は特に評価が高い。

坂本の写真は、審美性と記録性とを兼ね揃えていることが特徴とされ、その写真は、美術写真集や展覧会図録などに掲載されたほか、講義や講演会などの学術利用や、博物館・美術館等の資料記録として広汎に活用された。川瀬由照(文化庁)は、定点的なカメラアングルやライティングなど、坂本の撮影方はその後の文化財写真の規範となったことを指摘する(川瀬由照「仏像写真家と文化財(彫刻)写真」『月刊文化財』516号、2006年10月)。

白政 晶子

(早稲田大学大学院博士後期課程、
小田原市文化部学芸員)



図1《梵天立像》を台座から取り外した写真。明治大学博物館蔵。

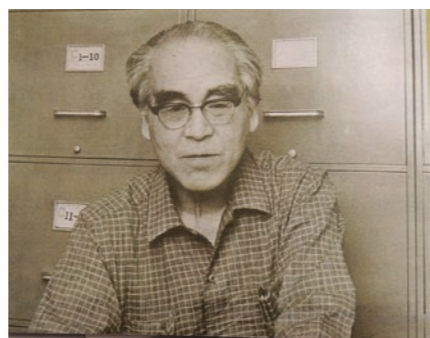


図2(坂本万七)(1967年頃)
(坂本万七「私の近況」『新刊ニュース』132号、1967年)より転載。

資料群の概況

2010~14年、写真群の撮影期間や用途に関する資料調査を行った。その数量は、ネガ約5万点、ネガ密着印画約5万点、カラースライド約3万点、スライド密着印画の写真帖89冊である。ネガとカラースライドは、内容が異なるが、原板とそれぞれの密着印画とは、映像・整理番号が一致し、写真群はネガとカラースライドの2種類に大別されるといえる。

ネガには、フィルムとガラス乾板が混在している。日本全国の寺社仏閣の彫刻、日本・東洋・西洋の陶磁器、国内の考古遺物、個人コレクションや美術館・博物館所蔵品の写真などがある。借用・販売に使用され、依頼のほか自発的な撮影が行われた。撮影期間は、1946~98年であり、坂本万七による撮影は1946~73年とみられ、没後の写真は、坂本明美の撮影によるものである。

スライド及び密着印画は、仏像、考古品、民藝、盆栽、建築、現代絵画など61種が確認される。撮影期間は、1949~76年であり、その大半は1950~60年代に製作された。講演会や授業でのスライド映写のほか、図録や写真集の掲載用としても作製・販売された。

仏像写真の端緒 法隆寺資料群

写真群は、京都・奈良の寺社宝物から



図3《釈迦三尊中尊像》明治大学博物館蔵。

使の所蔵品まで多種にわたるが、実物の調査、写真資材や文字資料などの検討を並行して行った結果、写真群のうち、1946年夏から撮影が開始された法隆寺写真群が最も古いことが判明した。これらは、ガラス乾板が大半で、1,000枚以上に上る。撮影は、1946~55年まで断続的に行われ、小金銅仏、六観音、《百済観音》、《金堂薬師如来坐像》、《金堂天蓋》、《玉虫厨子》、《橘夫人厨子》、《五重塔塑像群》など、法隆寺の主たる宝物を写真に収めている。このうち、《金堂釈迦三尊像》を撮影した数種のガラス乾板が最初のものであることが判明した(図3)。

法隆寺宝物の撮影は、「法隆寺宝物台帳」作成と、「法隆寺彫刻資料」シリーズの刊行という美術研究所の事業の一環として行われたが、企画者は坂本であり、撮影費用は坂本が受け持った。終戦直後のガラス乾板が希少であった時代に、坂本は、8×10サイズのガラス乾板を大量に準備して撮影に臨んだのだ。

坂本は、戦時中に自社と写真の大半を失い、戦後は、博物館・美術館所蔵資料のほか、日本各地の寺社の所蔵品を網羅的に撮影し、質・量ともに日本を代表する文化財写真家となる。その契機となったのが、美術研究所時代の《金堂釈迦三尊像》の撮影であった。坂本は、初めて目にした《金堂釈迦三尊像》に強い感動を覚え、「写真を媒体として多くの人にこの日本人のほこるべき文化財を伝えたいと念願し、「ぜひとも、正確な、しかも美しい写真を撮りたい」と思い、そのことに強い使命感を感じるようになった」という。



図4坂本万七が製作したカラースライド各種。明治大学博物館蔵。

カラースライド開発の功績

諸仏の撮影と並行し、「正確な、しかも美しい写真」を作り出すため、坂本は色彩の再現性が高いカラースライドを研究、作製し、学術的用途に供する写真づくりに取り組んだ(図4)。坂本は、モノクロームは形態をとらえることに長けているが、写真が真に学術研究に活用されるためには、カラーによる色彩の正確な再現が重要であると考えた。

坂本が着目したカラースライドは、戦時下の資材不足により商品化は戦後に持ち越され、終戦後の写真・映画・出版界ではカラー写真の商品化と活用に関心が高まっていた。

坂本は1949年に三井芸術プロダクションに移り、東洋古美術のスライド開発を行い、1953年4月に坂本写真研究所を設立し、カラースライド「TOYO SLIDE」シリーズを発売した。

考古、庭園、絵画、彫刻、工芸、建築、盆栽、陶磁器、民藝、京都の庭園など10種が確認され、教材や講演資料、また美術館所蔵目録、展覧会図録に用いられ、学術用のカラースライド開発の先鞭をつけた。先駆性のみならず、色彩が正確に再現性されていたことでも、美術史学の関係者や、写真家から高く評価された。

まとめ

坂本万七は、「生まれてきた以上、何か意義のある仕事をしたい、人類のために少しでも役にたつ仕事をしたい」という理念を持ち、それを写真で実現したいと考えていた。戦後の坂本が集中的に取り組んだ文化財の撮影は、その理念の実践であり、約10万枚という膨大な量の文化財写真として明治大学博物館に残されている。

収蔵室から

古代ギリシア陶器

黒像式エグザレイプトロンと赤像式スキュフォス

当館の考古部門には、現在9万点を超える資料が収蔵されていますが、その中には明治大学考古学研究室の発掘調査で出土した遺物の他に、海外の貴重な資料も多数含まれています。今回はその中から2000年に購入された古代ギリシア陶器をご紹介します。

古代ギリシアとは、一般的に前1200～前350年頃、いわゆる古代ローマ以前のギリシア・エーゲ海地方の文明を指し、陶器の様式は時代と特徴から「幾何学様式」「東方化様式」「黒像式」「赤像式」の4つに大別されます。その中でも、前700年頃コリントスで窯の焼成を制御できるようになったことから生み出された黒像式と、前500年頃に大型絵画流行の影響を受けたことでより豊かな表現方法を求めて発展した赤像式は、釉薬ではなく陶土の鉄分を焼成温度の変化で色として定着させるという珍しい彩色方法を用いており、また、背景にあたる素地が赤、文様やモチーフを黒にするというネガの表現である黒像式に対し、赤像式は背景を黒く覆いモチーフを素地の赤で残すというポジの表現をするため、両者はまったく対照的な見た目となっており、技術面・美術面ともに世界の陶器製作の歴史上重要であることから、当館でも黒像式陶器と赤像式陶器を収蔵しています。

当館の資料の詳細を見ていく前に、二つの様式における作成技術と過程について簡単にご説明しましょう。黒像式・赤像式はともに焼き上がりの素地が赤色になるよう鉄分の多い陶土を用います。二つの様式に共通する金属のような黒色の原料は、陶土精製時に生じた上澄みを日干しで濃縮させ、そこに灰汁等を加えた鉄分濃度の高い粘土液で、成形後の生乾きの素地のうち焼成後黒色にしたい部分のみ塗布します。なお、粘土液を塗布したのち、黒像式の場合はあらかじめ細部の文様を線刻して素地を露出させ、赤像式では更に粘土液を用いレリーフラインと呼ばれる細い隆線に文様の細部を描いておきます。焼成の際は、まず窯に酸素を送りながら950度程度の酸化焼成で陶器全体が一度酸化鉄の赤色を帯びるように焼き、その後、窯を閉じ温度を上げ還元焼成することで黒色の状態にします。そこから更に空気を送り2度目の酸化焼成を行うと素地の部分は再び赤くなりますが、粘土液を塗布した部分はより鉄分が多いため、還元率が高く既に焼結していることから赤色に戻ることなく黒色を保つというわけです。



A-239
黒像式エグザレイプトロン(幅19.3cm×高6.1cm)



A-238
赤像式スキュフォス
(幅13.8×高7.4cm)

さて、当館が所蔵するギリシア陶器のうち1点は黒像式エグザレイプトロン(香油入れ・芳香薬入れ)で、コリントス地方で黒像式が確立された前600年前後の資料です(A-239)。

一見すると高台付きの皿に似た形状ですが、その口縁部は他の種類の容器には見られぬほど極端に内側へ折り込まれています。

これは中に入れた液体が流出するのを防ぐため、当時はコリントスの特産であった香油を入れ、3つの把手に開けられた穴に紐を通し室内にぶら下げるなどして使用されたと推測されます。口縁部には市松状の幾何学文様、胴部下にはパルメット(ナツメヤシ)文の花びら部分が描かれ、胴部中央には黒色と紫色の2色で水鳥が帯状に連続配置(フリーズ)されています。更に空いた空間にはロータス文(ロゼッタ文)が散りばめられるなど、黒像式陶器がアテナイを中心とするアッティカ地方で一大黄金期を迎える以前の特徴を有する資料です。

もう1点は、赤像式スキュフォス(酒杯)で、数々の戦争を経た後の420年頃、赤像式晩期に作られた作品です(A-238)。ギリシアのどの地域で作られたものか定かではありませんが、口縁部は大変薄く陶器自体も大変滑らかで、金属を思わせる美しい黒色は古代ギリシアの作陶技術の高さを窺うことができます。胴部正面には寝椅子を背に杖を持つ着衣の人物、背面には杖と椀らしきものを手に走る全裸の青年が描かれ、その間の2つの把手の下には、パルメット文がギリシア唐草文に変化する過渡期である半唐草の状態で描かれています。また、人物描写では筋肉の線を厳選して描き、髪には石灰や白土を原料とした白色を用いるなどアッティカの赤像式らしさが見られます。

しかしその一方で、目を凝らしてみると粘土液の縁取りやレリーフラインに繊細さを欠く部分もあるのがわかります。この作品が作られた時期に流行した大型絵画が陶器の世界に与えた影響は装飾方法の多様化という良い点ばかりではなく、絵付け職人たちの多くが大型絵画の制作へ流れてしまうという事態を生みました。また、植民地政策を通じて職人が次々南イタリアへ移住したことも古代ギリシア陶器の衰退に拍車をかけました。この資料はそういった状況のもとで作られたものだったのかもしれない。

当館では海外の陶器を大系的に展示する機会は多くありませんが、これらの資料をよく観察していくと、日本の考古資料同様に地域を取り巻く環境や政治・生活の変化を反映していることがよくわかります。(土谷あゆみ)

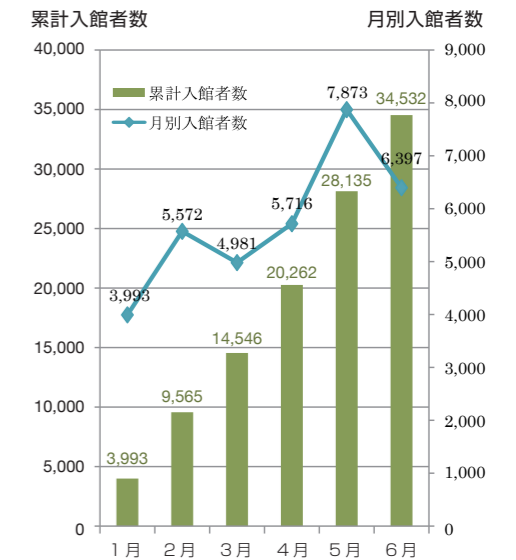
【参考文献】
・友部直・水田徹
『世界美術大全集3 エーゲ海とギリシア・アルカイック』1997 小学館
・水田徹
『世界美術大全集4 ギリシア・クラシックとヘレニズム』1995 小学館
・中森義宗・永井信一・小林忠・青柳正規
『パルテノンとギリシア陶器』1996 東信社

博物館入館者数の動き (2014年1月～6月:延べ人数)

2014年4月以降の
総入館者数累計 **664,687人**

| 1月～6月 | 延べ人数 |
|---------|-------|
| 図書室利用者数 | 2,167 |
| 教室等利用者数 | 1,502 |

| 特別展来場者内訳 | 開催日数 | 来場者数 |
|-----------|--------------------------|------------|
| 1/24～2/28 | 近代日本の幕開けと私立法律学校 | 36日間 2,532 |
| 3/15～4/27 | 有田焼一商品の伝統・進化・変容 | 44日間 2,649 |
| 5/3～6/22 | 明大博物館クロニクルー過去・現在・そして、未来ー | 51日間 4,835 |
| 6/28～8/8 | オーソドックスな古文書展示 続編 | 42日間 2,326 |



団体見学の記録 2014年1月～6月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

- 【一般】 トラベルキャスター津田令子さんが案内する旅(20名)／さざなみ会(15名)／シニア大学大宮校ナンデモ体験隊(17名)／歩け2万キロ旅の会(25名)／奈良学友会関東支部(30名)／シュミートクラブ(23名)／就労移行支援事業所リバーサル(13名)／兵庫県立津名高等学校同窓会東京支部(35名)／かわさき歩け歩け運動連合会(100名)／紅葉の会(11名)／パラボラシニアゆう倶楽部(11名)／NAKA106町(17名)／新宿区高齢者学級連合会(40名)／八千代会(23名)／越谷市郷土研究会(50名)／早稲田大学オープンカレッジ(16名)／日本セカンドライフ協会(37名)／カッコイイ おやじの会(23名)／道の会(13名)
- 【小・中学校】 川崎市立大師中学校(6名)／中野区立北中野中学校 第2学年(7名)／三郷市立瑞穂中学校(6名)／府中市立府中第二中学校(17名)／南三陸町立歌津中学校(4名)／足立区立六月中学校(12名)／岐阜中央中学校(5名)／群馬県吉岡中学校(7名)／豊橋市立吉田方中学校(5名)
- 【高等学校】 二松學舎大学附属高等学校(30名)／保善高等学校(36名)／茨城高等学校(31名)／神奈川県立住吉高等学校(130名)／東京学芸大学附属国際中等教育学校(2名)／山脇学園高等学校(73名)／正則学園高等学校(20名)
- 【大学・大学院・専門学校】 お茶の水女子大学文教育学部 考古学通論2(17名)／SEMESTER AT SEA(40名)／武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部(10名)／大原日本語学院(18名)／明治大学情報コミュニケーション学部 タイ・ラオス留学生(20名)

M2 カタログ 「玉里舟塚古墳」Tシャツ 好評発売中！！

ただいまM2(エムツー)ショップでは、当館の常設展示室で紹介している玉里舟塚古墳のTシャツが発売中です。

茨城県に位置する玉里舟塚古墳から出土した形象埴輪のシルエットが目を引くデザインで、左胸のマークは前方後円墳をモチーフにしています。色は着こなしがしやすい紺色で、サイズはM・Lと取り揃えていますが、数量限定なのでお早めにお買い求めください。古墳が好きな方、インパクトのあるTシャツをお探しの方にはオススメの一品です。



(販売価格:各サイズ1,000円)